

■ 概況

4/8～4/14のNYMEX・WTI先物市場は、59.32～63.15ドルの範囲で推移した。

4月15日は、前日発表の国際エネルギー機関(IEA)月報で、2021年世界石油需要が上方修正、需給改善の方向性を明確に打ち出されたり、この日発表の3月米国小売売上高が堅調で、米国株価が最高値を更新されるなど、経済の先行きへの期待感から、4日続伸した。5月限の終値は前日比0.31ドル高の63.46ドル。

週末16日は、朝方、買いが先行したが、このところの堅調な原油価格の推移から、利益確定売りや持ち高調整の売りが優勢となり、5営業日ぶりに反落した。なお、米国内で稼働中の石油掘削装置は前週末比7基増の344基。5月限の終値は前日比0.33ドル安の63.13ドル。

週明け19日は、外為市場のドル安進行に伴う原油先物の割安感や先週末の需給の引き締め感から、買いが優勢となり反発した。ただ、インド等途上国で感染が再拡大していることへの警戒感から、上値は重かった。5月限の終値は0.25ドル高の63.38ドル。

20日は、朝方、リビア国営石油の原油輸出への不可抗力条項発動が伝わり、一時上昇したものの、インド、フィリピン、パキスタン等での新型コロナの新規感染者再拡大や米国株式市場の400ドル近い下落で、反落した。5月限の終値は前日比0.94ドル安の62.44ドル。

21日は、米国エネルギー情報局(EIA)の週間在庫報告で、米国内原油在庫が市場予想に反する積み増しになったこと、また、新型コロナの感染再拡大の懸念、さらには、イラン核合意に関する非公式協議の進展で、続落した。この日から取引

の中心限月となった6月限の終値は前日比1.32ドル安の61.35ドル。

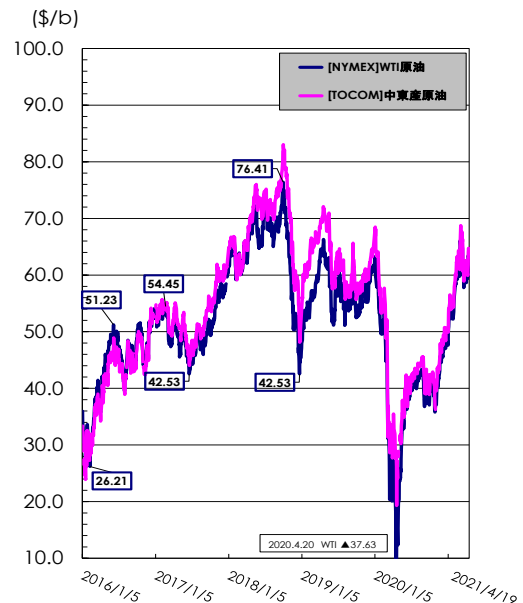
アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(6月渡し)は、4月8日～14日の間60.80～62.70ドルの範囲で推移した。4月15日64.70ドル、16日65.50ドル、19日64.60ドル、20日65.80ドル、21日64.00ドルと推移した。

為替は4月8日～14日の間108.85～109.83円の範囲で推移した。4月15日108.91円、16日108.72円、19日108.66円、20日108.20円、21日108.08円で推移した。

財務省が4月19日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、3月下旬の原油輸入平均CIF価格は、43,549円/klで、前旬比2,660円高、ドル建て63.61ドルで前旬比2.66ドル高、為替レートは1ドル/108.84円。また、同日発表の貿易統計(速報・旬間)によると、3月の原油輸入平均CIF価格は、41,503円/klで、前月比4,859円高、ドル建て61.62ドルで前月比5.82ドル高、為替レートは1ドル/107.08円。

そのような中で、4月19日時点の小売価格は、ガソリンが前週(4月12日)比横ばい、軽油も同横ばい、灯油は同2円の値上がり(18円ベース)だった。ガソリンは2週ぶりの横ばい、軽油は3週連続の横ばい、灯油は21週連続の値上がりだった。この週(4月第3週)の原油コストは値上がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、前週比1.5円の値上げとなった。

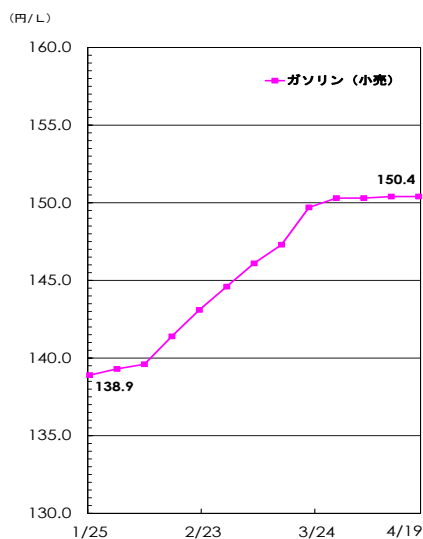
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	4/11～4/17	2,596 ▼ -123	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	67.5 ▼ -3.2	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	4/17	11,651 ▲ 488	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	4/19	63.95 ▲ 4.03	▲ 36.0
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	4/19	63.38 ▲ 3.68	▲ 101.0
	原油CIF単価 (\$/bbl)	3月下旬	63.61 ▲ 2.66	▲ 1.45
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	43,549 ▲ 2,660	▲ 1,321
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	108.84 ▼ -2.18	▼ -0.84
	外国為替TTSレート (¥/\$)	4/19	109.66 ▲ 1.09	▼ -0.77



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比
需給	生産	4/11 ~ 4/17	818 ▼ -56 ▲ -	
	輸入	"	n.a. n.a. n.a.	
	出荷	"	701 ▼ -122 ▲ -	
	輸出	"	59 ▲ 54 ▼ -	
	在庫	4/17	1,847 ▲ 58 ▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	4/13 ~ 4/19	58.9 ▼ -0.6 ▲ 25.2	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	4/13 ~ 4/19	58.5 ▲ 2.5 ▲ 31.3
		(TOCOM/中部)	4/19	59.4 ▲ 1.9 ▲ 32.2
	小売 [週動向] (資工庁公表)	4/19	150.4 ➡ 0.0 ▲ 19.5	

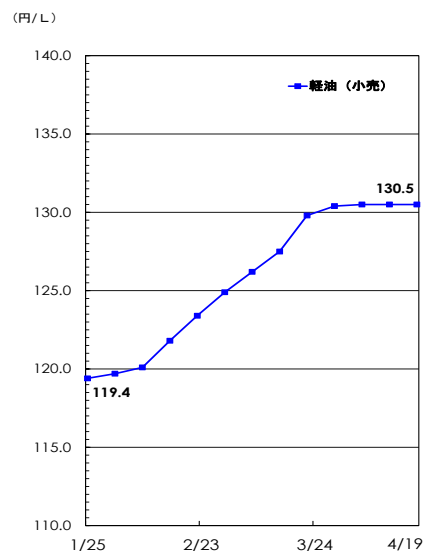
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

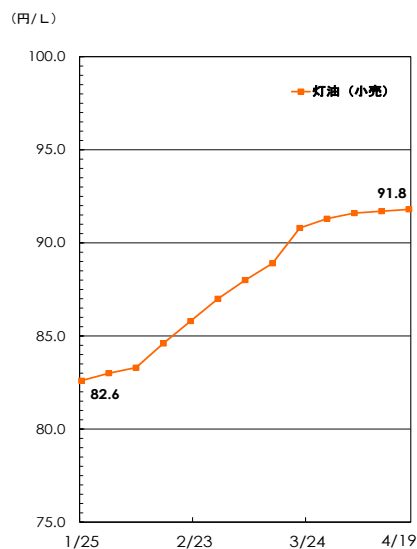
軽油		今週	前週比	前年比
需給	生産	4/11 ~ 4/17	635 ▼ -25 ▼ -	
	輸入	"	n.a. n.a. n.a.	
	出荷	"	543 ▼ -63 ▼ -	
	輸出	"	5 ➡ 0 ▼ -	
	在庫	4/17	1,605 ▲ 87 ▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	4/13 ~ 4/19	60.9 ▼ -1.0 ▲ 24.6	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	4/13 ~ 4/19	62.7 ▲ 0.6 ▲ 20.5
		(TOCOM/中部)	4/19	- - -
	小売 [週動向] (資工庁公表)	4/19	130.5 ➡ 0.0 ▲ 18.3	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比
需給	生産	4/11 ~ 4/17	141 ▼ -64 ▼ -	
	輸入	"	n.a. n.a. n.a.	
	出荷	"	145 ▼ -24 ▼ -	
	輸出	"	0 ➡ 0 ▼ -	
	在庫	4/17	1,462 ▼ -3 ▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	4/13 ~ 4/19	60.3 ▼ -0.9 ▲ 24.1	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	4/13 ~ 4/19	56.6 ▲ 1.1 ▲ 25.2
		(TOCOM/中部)	4/19	59.5 ▲ 2.0 ▲ 25.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	4/19	91.8 ▲ 0.1 ▲ 11.2	



■ 関連情報

1 海外/原油

4月21日のNYMEXのWTI先物原油は、同日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の週間在庫報告で、米国内原油在庫が前週末比60万バレル増と市場予想(同300万バレル減)に反する積み増しとなり、また、インドで都市封鎖が再開されるなど世界的な新型コロナ再感染拡大で、石油需給の先行き懸念が拡大し、続落した。さらには、イラン核合意復帰問題に関する英仏独露中とイランの次官級協議で来週の合同委員会開催を合意したことも、イランの原油輸出拡大を懸念させる要因となった。この日から取引の中心限月となった6月限の終値は前日比1.32ドル安の61.35ドル、7月限の終値は同

1.33ドル安の61.27ドル。

EIAによると、4月19日時点のガソリンの小売価格は、前週比0.6セント値上がりの1ガロン2.855ドル(82.6円/ℓ)、ディーゼルは同0.5セント値下がり3.124ドル(90.4円/ℓ)となった。ガソリンは2週ぶりの値上がり、ディーゼルは4週連続の値下がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2021年4月11日～4月17日に休止したトッパー能力は88.7万バレル/日、前週に対して12.5万バレル/日増加した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は259.6万klと、前週に比べ12.3万kl減少。前年に対しては39.9万klの減少。トッパー稼働率は67.5%と前週に対して3.2ポイントの減少、前年に対しては9.0ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてジェットが増産、その他の油種で減産となった。ガソリン/6.4%減、ジェット/5.2%増、灯油/31.1%減、軽油/3.8%減、A重油/17.2%減、C重油/5.0%減。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.0万kl減)。軽油の輸出は0.5万kl(前週比0.0万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は前週比で全油種で減少した。前年比でガソリン、C重油が増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は70.1万kl(対前週14.8%減)と2週振りで減少した。ジェット6.8万kl(対前週21.0%減)、灯油14.5万kl(対前週14.7%減)、軽油54.3万kl(対前週10.3%減)、A重油14.8万kl(対前週20.3%減)、C重油17.8万kl(対前週0.1%減)。

(単位:千kl)

	今週 (4/11 ~ 4/17)	前週 (4/4 ~ 4/10)	前週比
ガソリン	701	823	▼ -122 (-15%)
ジェット燃料	68	86	▼ -18 (-21%)
灯油	145	169	▼ -24 (-14%)
軽油	543	606	▼ -63 (-10%)
A重油	148	186	▼ -38 (-20%)
C重油	178	178	▶ 0 (0%)
合計	1,783	2,048	▼ -265 (-13%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

4月17日時点の在庫は、灯油で取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。前年に対しては全油種で増加となった。

ガソリンは184.7万kl、前週差5.8万kl増。前年に対しては5.3万kl多い。

灯油は146.2万kl、前週差0.3万kl減。前年に対しては5.4万kl多い。

軽油は160.5万kl、前週差8.7万kl増。前年に対しては30.8万kl多い。

A重油は77.4万kl、前週差2.0万kl増。前年に対しては8.0万kl多い。

C重油は186.7万kl、前週差2.2万kl増。前年に対しては2.6万kl多い。

(単位:千kl)

	今週 (4/17)	前週 (4/10)	前週比
ガソリン	1,847	1,789	▲ 58 (3%)
ジェット燃料	803	780	▲ 23 (3%)
灯油	1,462	1,465	▼ -3 (-0%)
軽油	1,605	1,518	▲ 87 (6%)
A重油	774	754	▲ 20 (3%)
C重油	1,867	1,845	▲ 22 (1%)
合計	8,358	8,151	▲ 207 (2.5%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

4月13日～19日の指標原油価格は前週(4月6日～4月12日)比で値上がりし、為替レートの円高がこれをわずかに相殺したが、円建ての原油コストは値上がりしたと見られる。

これを受けて、次週の大手元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社前週比1.5円の値上げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

4月13日～19日の製品スポット市況は、4月6日～4月12日平均と比べ、3品の先物取引と灯油の海上取引は値上がりしたが、その他の取引は値下がりした。

直近(4/13～4/19)の陸上スポット価格平均値(千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格)は、前週比で、ガソリンは0.6円の値下がり、灯油は0.9円の値下がり、軽油は1.0円の値下がりだった。直近週(4/13～4/19)において、ガソリンは112円台で値下がり後回復、灯油は60円台で値下がり後わずかに値上がり、軽油は60～61円台で値下がり後ほぼ横ばいで推移した。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(4/13～4/19)に、前週比で、ガソリンは0.8円の値下がり、灯油は0.9円の値上がり、軽油は1.1円の値下がりだった。海上スポット価格は、同期間(4/13～4/19)に、ガソリンは113～114円台でわずかに値下がり後横ばい、灯油は57～58円台で値上がり後値下がり、軽油は62～63円台で値下がり後横ばいで推移した。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは2.5円の値上がり、灯油は1.1円の値上がり、軽油は0.6円の値上がりだった。先物価格は、同期間(4/13～4/19)に、ガソリン110～113円台で大きく値上がり、灯油56～57円台で値上がり後わずかに値下がり、軽油62～63円台で値上がり後大きく値下がりして推移した。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー 4地区平均]	今週 (4/13～4/19)	前週 (4/6～4/12)	前週比
	レギュラー	58.9	59.5
灯油	60.3	61.2	▼ -0.9
軽油	60.9	61.9	▼ -1.0

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値 [平均]]	今週 (4/13～4/19)	前週 (4/6～4/12)	前週比
	レギュラー	58.5	56.0
灯油	56.6	55.5	▲ 1.1
軽油	62.7	62.1	▲ 0.6

※上記価格は税抜き価格

参考値 (4/13～4/19実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -0.6	▲ 2.5	▲ 0.9
灯油	▼ -0.9	▲ 1.1	▲ 0.1
軽油	▼ -1.0	▲ 0.6	▼ -0.2
A重油	▼ -1.1		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

4月19日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週(4月12日)比横ばいの150.4円、軽油も同横ばいの130.5円、灯油は18%ペースで同2円高の91.8円(1%ペースでは同0.1円高の91.8円)。ガソリンは2週ぶりの横ばい、軽油は3週連続の横ばい、灯油は21週連続の値上がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは20府県、横ばいは4県、値下がり23都道府県だった。全国最安値は144.8円の徳島県(前週比0.9円高)・埼玉県(同0.3円安)・宮城県(同0.8円安)の3県、最高値は159.0円の鹿児島県(同0.4円高)だった。最も値上がりしたのは同2.1円高の長崎県(157.8円)で、横ばいは島根県など4県、最も値下がりしたのは

同0.9円安の愛知県(149.1円)・富山県(150.0円)の2県だった。

今週(4月13日～19日)は、指標原油価格が値上がりし、為替レートの円高がこれをわずかに相殺したが、円建ての原油コストは値上がりしたと見られる。次週(4月22日～28日)適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社前週比1.5円の値上げとなった。次回調査時(4月26日)のガソリンの小売価格は小幅な値上がりが見込まれる。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (4/19)	前週 (4/12)	前週比	直近高値
レギュラー	150.4	150.4	➡ 0.0	08/8/4 185.1
灯油	91.8	91.7	▲ 0.1	08/8/11 132.1
軽油	130.5	130.5	➡ 0.0	08/8/4 167.4

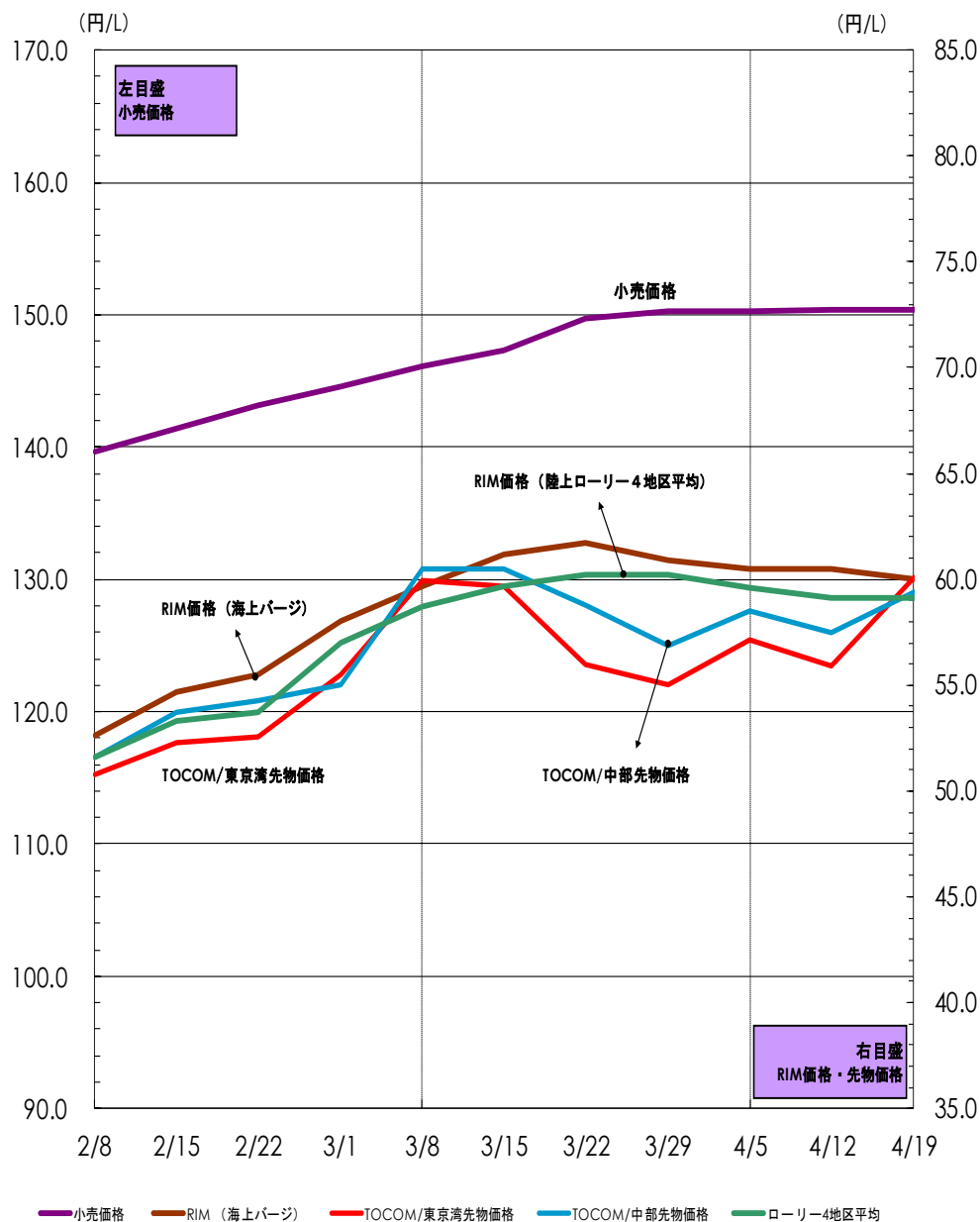
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2021/2/8 ~ 2021/4/19)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2021第5号)の公表は、4/30(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(令和2年3月末現在)は、8月26日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。
当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。
また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。
当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。
「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。
中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」
中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。
原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。
TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPIに掲載)。